
恋占い～哀の気持ち～

リリカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋占い〜哀の気持ち〜

【Nコード】

N9144E

【作者名】

リリカ

【あらすじ】

哀視点で書いてみましたコ哀になる前のコ哀な感じです

第一話 雷の鳴るところ

私が最近パソコンで気に入っているサイト
「恋占い」

吉田さんにすすめられて見始めたんだけど
結構おもしろい

そして恋占いの相手は今私の隣にいる工藤君・・・だったりもする
今日はゲームをしに少年探偵団のみんなが遊びに来ている

「花火大会・・・？」

工藤君は円谷君の言った言葉をオウム返しに聞く

「はい 今日の夕方午後6時から
米花川でやるんですよ 皆でいきましょーよ」

時計は3時半・・・随分と急な話だけど
ちょうど夜博士いないし・・・いいかしら
そこで5時半に米花橋と待ち合わせをして皆は帰っていた

4時 私はダンスから浴衣をだしていた
前には着ていけなかったからちょうど良いだろう

5時さっきからソワソワしているのは自分でも分かった
一応見ておこうかしら

パソコンに向き直り電源を入れる
サイトを「恋占い」にして結果は

雷が鳴るところ恋のキューピットあり

つまり雨が降ればいいのかしら

5時半米花橋には既にみんないた

思ったとおり吉田さんも浴衣

ピンクの花柄とてもカラフルで吉田さんにぴったりだった

私は黒の花火柄

男子は全員洋服

吉田さん円谷君小嶋君とちよつと間を空けて歩く私と工藤君
こんな一時も楽しく思える

「へえ 灰原も浴衣着るのか」

「何 その言い方」

「ほら 毎年おめえこう・・・祭の時って洋服じゃねーか」

「あなた・・・私のことを男の子だと思っているの？」

「思っわけねえだろ・・・でもその浴衣 似合ってるぜ」

「え・・・？」

嬉しかった

わざわざ出しておいたかいがあつた

カラコロとしばらく私の下駄の音がする

自分の中では心臓の鼓動がとても良く聞こえた

「あれっ あいつらはどこだ？」

工藤君が声を上げる

つられて私も前を見る

確かに3人とも忽然と消えていた

ずっと真下をむいていたから気付かなかった

「本当」

「しょうがねえなあ」

工藤君は頭をかくとキョロキョロと見回す

「はあ・・・あいつらどこいったんだ？」

「あつち行つてみたら？」

「ん？ああ　そうだな」

と私が指さす方へと進んでいくうち
とんでもないところへでてしまった

「おいおい・・・どこだよここ」

地元の工藤君でも分からない道並み
もしかして私は方向音痴なのか

「あ、あの工藤君、ごめ
」

謝ろうと声をかけた瞬間
夕立か雨が降ってきた

「灰原 走るぞ！」

工藤君は私の腕をつかみ走り出した
しばらくして

私たちはどこか知らない神社に辿りついた
そして雨はやみそうにない

でも 彼と腕だけでもつなぐ事ができた
それだけで私は十分だった

「やみそうにねえな 雨が弱くなるまで待つか」

その時

雷が空で光り 鳴り始めた

私は夏なのに少し雨にかかったせいか寒く 少し震えてしまった

「怖いのか？」

雷を怖いと勘違いしているようだ

でも 一応怖がっているふりをしてみよう

「・・・・・・・・少し・・・・・・・・」

工藤君はその様子を見てどう思ったのだろう
心配してくれるかしら

そして私は思いがけない行動に少し戸惑った

何故か私の右手が温かい 見ると工藤君が左手で私の左手を握っている

「え・・・・・・・・？」

「嫌か？」

「いいえ……別に」

「大丈夫 俺がついてる 約束したろ？
俺はお前を守るって」

「あら……私は組織からしか守らないって思っていたわ」

憎まれ口をたたいてしまう自分を恨んだ
本当は嬉しいのに……
手を握ってもらうのも
約束を覚えていてくれたことも
でも彼は怒ってない様子だ

「お やんできたな 行くぞ」

「え、ええ」

二人きりになれなくなると思うと名残惜しいけど
もう行かないと心配するわよね
ふとあの占いの事を思い出す

雷の鳴るところ恋のキューピットあり

確かに そうかもしれないわね

第一話 雷の鳴るところ（後書き）

こんなの書いてる暇があるなら

紫陽花の屋敷をもっと更新しろよと思いますよね

両立させて連載したいなと思っています

第二話 甘えてみると

風邪をひいてしまった

原因はあの花火大会の時の雨 あの時濡れたままだったから
そして先ほど別にする事がなかったからパソコンをしていた
だから体が重く感じる・・・自業自得よね
あのサイトも見てみた
そして結果は

甘えてみると恋の急転あり

つといつても甘える人がいないし別に甘えたくない
だけど・・・博士こんな時に限って学会に行つて・・・
ベットで転がっているうち氷枕がもう冷たくなってきた
そろそろ変えようかしら でも体が重い
きつと立ってしまったたら倒れてしまうだろう
そんな時

「博士ー！！ボール補充してくれよー！！つて灰原 お前・・・ど
うしたんだ？」

「見れば分かるでしょ 風邪よ 風邪」

「まさか 昨日の雨か？」

工藤君は来てすぐに凶星な事を言ってくる
といつても理由がそれしかないからしょうがない

「そうよ・・・」

「どれどれ」

工藤君の顔が見る見るうちに近づいて来る
彼は何を思ったのだろう

私のおでこに彼のおでこをくつつける
彼には躊躇いというものが無いのだろうか

「あー 確におでこ熱いなー おいおい水枕冷たくねえじゃねえか
待つてろ 今変えてくるから」

水枕を持ちながら彼は台所へいつてしまった
それにしてもさっきの工藤君の行動にはドキドキした
そのドキドキからまた熱をあげたのか
体がだんだん熱くなってきた
工藤君が水枕を持って帰ってきた
頭がひんやりするほど気持ちよかった

「どうだ 体調は？」

「変わらないわ」

素っ気無い 話が途切れてしまう
本当はもっと話したいのに・・・

「あ もう昼か 腹減ったろ？」

「少し」

「んじゃ ちょっと待つてろ」

すると彼はまた台所に消えていった

そういえばやっと甘えられる人を見つけたかもしれない
でも皆彼がやってくれて言う必要も無い

それにこれ以上は無理な気がした

数十分して彼が帰ってくる 鍋を持って

「ほれ・・・」

彼はそばにあった机の上に鍋を置きおわんに盛り付ける
中身はおかゆだった

「立てるか？」

「・・・ごめんなさい もう帰って良いわ 後は自分でする」

もう彼に迷惑を掛けれない

「どうして謝るんだ？」

「もう・・・あなたに迷惑を掛けれない」

すると彼はベットに座り笑った

「別に迷惑だなんて思ってたねえよ

昨日の事は俺のせいでもある

それに今俺は勝手にやってるだけだ」

どうして彼は笑っていられるのだろう

彼のせいではない 私のせいなのに・・・

どうして私を許せるのだろう

「…………だから もっと甘えてくれても良いんだよ」

「え…………？」

「今 お前は苦しんでるんだ それをばーっと見てられるかって」

彼は手を私に差し出す

思わず私も手を差し出す

「肩かすから そのいすに座れよ」

私は彼のいうとおりにした

おわんには出来上がったばかりのおかゆ
一口食べてみた

「…………おいしい」

「…………良かった」

本当においしかった 彼は一人で生活してた頃もあってか
とても料理が上手だった…………少し熱いけど

甘えてみると恋の急転あり

次彼が風邪をひいたら私に甘えてもいい…………そう思った

第二話 甘えてみると（後書き）

・・・そろそろ脳内が爆発しそうです

明後日から二学期なので

さらに

投稿しづらくなります（もうあまり投稿してませんが）

次回が最終回です

キーワードは3つ！！

素直 動物園 告白 です

お楽しみに！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9144e/>

恋占い～哀の気持ち～

2010年10月10日07時24分発行